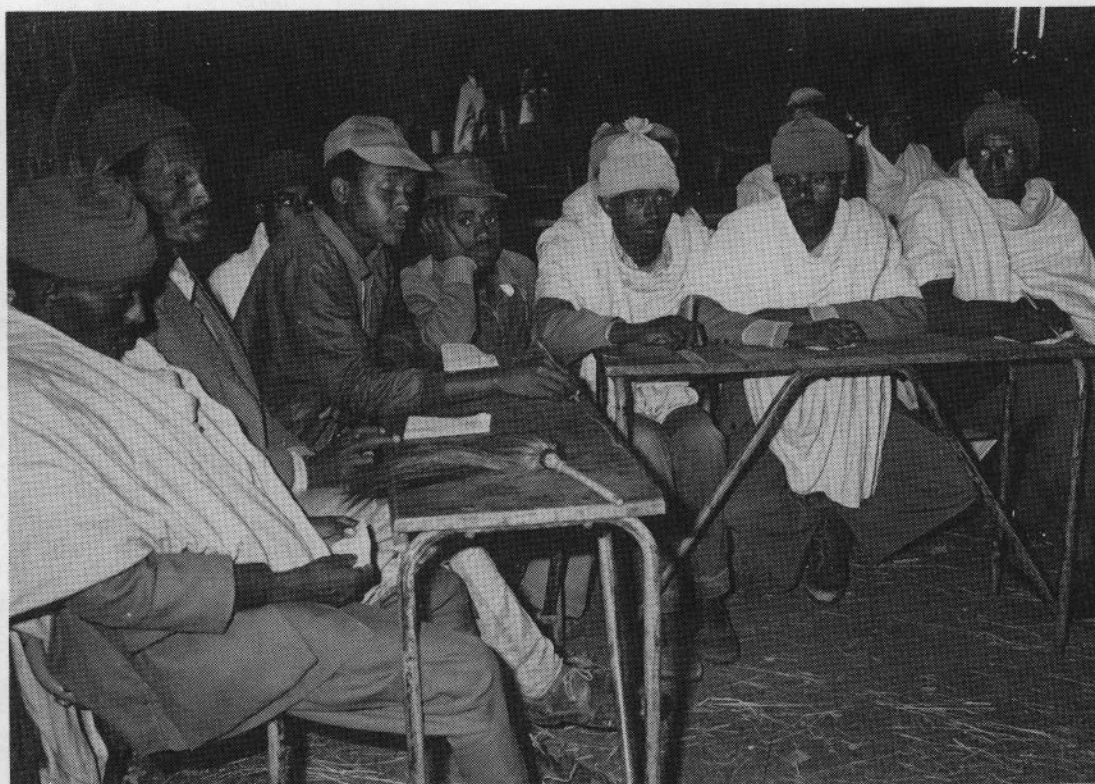


Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

No.57

試 行 錯 誤



村の復興のため話しあう(マーシャ村 農業協同組合)

特集 エチオピアの新プロジェクト

| | |
|-------------------------|----|
| 復興のために | 2 |
| 緑は錦の御旗か | 4 |
| エチオピアと僕たち | 5 |
| エチオピア緊急医療救援に参加して | 6 |
| エチオピア都市難民エリアス氏の場合 | 8 |
| 続・傷ついた微笑の国 | 10 |
| レストラン探訪 プノンペン | 11 |
| Dear, My Friend | 12 |

復興のために——エチオピア・マーシャ村

荻野美智子
JVC事業担当

JVCの選択

アジバルでの医療活動も軌道に乗り、患者数が次第に減り始めた昨年の5月ごろから現地のスタッフの間で次のようなことが言われ始めた。「起きてしまった干ばつや飢餓に対してパンソウコウのような役目をするのではなく、その原因を取り除くためわれわれにできることはないか」というものである。いわゆる緊急救援の限界に対する疑問と無力感である。そしてこれは日本人スタッフの自分勝手な思いこみばかりでなく、自分たちの将来を考える何人かのエチオピア人の思いでもあった。

しかし私たちの現実の能力からしてみると、エチオピアの復興にかかわるなど夢に近しいものだった。人材、資金の見通しはほとんどなく、これから何年かかるであろう復興のために私たちがずっとかかわることができるか、その自信もなかった。それでも緊急医療プロジェクトが始まって以来数万人もの患者に接し、いやというほど被災地の人々を見てきた医者の方林さんの「なんとかしてやって行きたい」という情熱は消えず、やがて現地と東京本部で活動する者に覚悟を決めさせるようになった。

9月下旬になってJVC本部より岩崎代表とソマリア担当の柴田がエチオピアを訪問した。その際JVCの病院で働く約30人のエチオピア人スタッフと会議を持った。そしてJVC側からこれほどの干ばつや飢餓がなぜおきたかと質問してみた。それに対し次のような答が返ってきた。

- ①雨が長く降らなかったこと
- ②農業の仕方を知らなかったこと（土地を酷使し続け、疲弊させてしまった）
- ③木を切りすぎたこと（70年前はエチオピア全土の60%が木に覆われていたと言われている。現在は政府発表によると、全土の3.1%、アジバル付近では1.0%と言われている。木は料理、暖房用に使用される。また収入のない人は伐採した木を売っている）
- ④老人たちはこの過酷な運命も神の思し召しと見え、対策をとらなかったこと

続いてJVC側から、患者数も減ってきているので病院の閉鎖も遠くない。従ってJVCに雇われる（JVCより収入を得ている）状態も長くは続かないことを説明した。またそのような状況の中で人々は自分た

| | |
|---------|---------------------------------------|
| プロジェクト名 | マーシャ村総合的領域復興促進プロジェクト |
| 地域 | エチオピア北部(ウォロ州、ワレメノ郡、マーシャ村—アジバル村から30km) |
| 期間 | 1986.3～3年間以上 |
| 実行協力団体 | 農業協同組合 地域行政事務所、ワレメノ郡労働党 |
| 関係政府機関 | 救済復興委員会(R. R. C) |
| 関係国際機関 | ユニセフエチオピア アフリカ国際家畜研究所 UNDP(国連環境計画) |

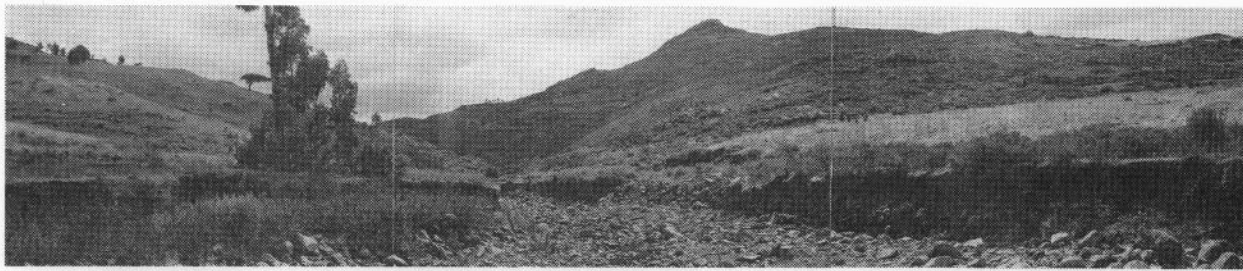
ちの暮らしについてどう考えているのかを尋ねた。「われわれは祖先からずっとこの土地で農業をしてきた。干ばつで荒れてしまったが、自分たちの土地で農業を営めるように努力したい」。

エチオピアの国民の80%は農民である。アジバルの周辺についてはほとんど全員が農民といってもよい。彼らは食糧の配給を受けるより、自分たちで作物を作りたいことを望んでいた。病院が閉鎖され、一時的に収入が途絶えることをためらってはいなかった。

この会議の結果、来年度のJVCの活動として、「総合的領域復興促進プロジェクト」の実施が決定した。

アジバル村からマーシャ村へ

当初はJVCの病院のあるアジバル村でのプロジェクトを計画した。しかしアジバル村にはRRCの食糧配給センター、農業省の地域事務所、保健省のクリニックなどがあり行政のサービスもいきわたっている。しかし幹線道路から少しはずれると、もう行政サービスは届かず、さらに奥地へ入ると道路も整備されていないため配給物資もほとんど届かない。まさに「見放された状況」にあるといえる。だからこそ援助の必要性はあるのだが、援助が失敗する危険性もある。それで多くの救援団体はアスファルトの幹線道路沿いにセンターを設置し、物資補給



中央の斜面に植林を行う（マーシャ村）

にあっていた。1984年の暮れにはそのようなセンターが幹線道路沿いに満杯であった。

JVCは結果的にマーシャ村でプロジェクトを始めることにしたが、その理由は主に3つある。

- ①大きな街から離れていて行政サービスを受けにくい。
- ②マーシャ村からさらに60km離れたコレブでは毎日徒歩3日をかけてアジバル村まで食糧配給を受けに来ている。人々は飢えて病気になり、配給を取りに行くこともできずただ死を待っている。私たちは少しでもコレブに近づきたかった。
- ③マーシャ村の農業協同組合の人々は自らで何とか貯水池を作るなど、農業の方法を改善しようとしている。復興への意欲が見られるが、その方法がわからなかったり、資金不足、行政への対応のまずさなどから失敗してきている。従って彼らの復興が成功するように手助けすることは意味がある。

「総合的地域復興促進プロジェクト」

長い間干ばつで荒れた土地や、村人の生活、地域の約束事が崩れてしまった状態を元に戻す復興作業、すなわち「村のたてなおし」はいろいろな側面から行う必要がある。木さえ植えれば、水さえ確保できれば、村が立ち直るわけではない。そういう意味でマーシャ村のプロジェクトには「総合的」という言葉が付けられている。ではいったいこのプロジェクトでは何をするのか。

岩崎代表が9月にエチオピアに行った際のエチオピア人スタッフは飢餓の原因の1つとして、農業の仕方を知らず、土地を酷使し続けた点をあげている。マーシャ村の付近の人々はほとんど農民であり、農業で自立していくことを望んでいる。JVCは「試験農場」を作り耕地の保全の仕方、作付の方法、種や農機具の改良などを行う。農場は1haずつ、それぞれの農業協同組合にまかせ、組合員（農民）が月に3回ずつ交替で農場で働き、技術を学ぶ。働いた日は日当として食物を受け取る（Food For Work）。

エチオピアは革命時に農地解放を行ったため大土地所有者はいない。農民はそれぞれ自分たち自身の農地を持っているので、JVC農場で働きながら学んだことは自分たちの土地で実践できる。

農業には水が欠かせない。マーシャ村の人々も自分たちで灌漑用の貯水池を作ったがハゲ山をたたくつける雨が土砂を流し、池を埋めてしまった。しっかりした貯水池を作るため、池の斜面の角度、石の積み方などはJVCの日本人スタッフと村人が研究する。この作業は貯水池の恩恵を受ける農業協同組合の人々が協同行う。

貯水池を作ってもハゲ山は雨が降るとまた土砂で池は埋まってしまう。人々は自分たちが木を切りすぎたためハゲ山になったことを気づいている。JVCは植林を行い、山の斜面に段をつけて土砂を防ぐ。またこのプロジェクトが軌道に乗れば、地域の公衆衛生、保健教育を行う。農場で取れた野菜を使った料理教室も行いたいと思っている。

マーシャ村の「たてなおし」プロジェクトは①農業②水③森④教育の4つが組み合わせられたものである。もちろんこの4つを一度にやろうというのではない。ゆっくり時間をかけ、彼らの仲間に入れてもらい、一緒にやっていくという活動原則に従う。

JVCとマーシャ村の人々との協同作業によりマーシャ村のたてなおしが成功すれば、まわりの村にも波及すると思われる。彼らは政府の再定住プロジェクトの対象地域に指定され、自分たちの土地からいつ追いたてられるのかわからないのである。

日本でのキャンペーン活動

以上のように、マーシャ村をモデルケースとした「総合的地域復興促進プロジェクト」を本年3月を目度開始する。JVCは少なくとも3年間に関わる予定（計画）である。

またこのプロジェクトを通してエチオピアの人々、ひいてはアフリカの人々の抱えている問題を多くの日本人に知ってもらい、またプロジェクトを支える資金を確保するためユニセフ協会と協同で今年4月から1年間の予定でキャンペーン活動を実施する。

緑は錦の御旗か

グリーン・プロジェクトに関する大橋さんの問いに答えて

エチオピアの農村開発プロジェクトに関してシャプラニールの大橋正明さんからいくつかの疑問が寄せられました。シャプラニールはバングラデシュの農村で10年以上も開発問題に取り組んでいるグループです。大橋さんの問いは誤解もありますが、開発問題の本質をつくもです。この問いに答える形でプロジェクトの説明をしたいと思います。

①このプロジェクトでは村人の顔が見えません。村人たちは木を植えることをどのようにとらえているのでしょうか。

JVCは広大なエチオピアの山々で植林しようとするわけではありません。マーシャ村の人々といっしょに村を復興させたいと思っています。マーシャ村を選んだ理由は先にのべました。まず彼らが自分たち自身で村を守るために自主的にこのプロジェクトに参加しました。彼らも木を切りすぎたことを反省し、村の復興に植林は大切な要素だと思っています。

②植林することで村人が耕作できなくなったり、木を切ることも禁止され、薪が不足するなど結果的に住民の生活を圧迫しませんか。

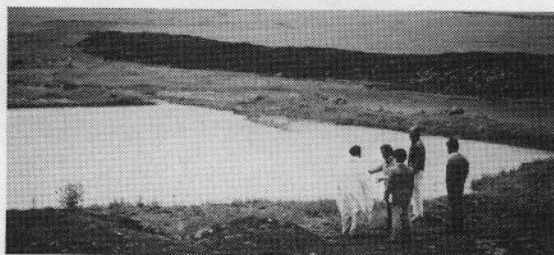
耕作地でなく貯水池を囲む山の斜面に木を植えるだけです。その心配はありません。JVCが農業をしたり植林しようとする地域は村の中のほんの限られた一部にすぎません。

③植林によってかえって貧富の差を広げることになりませんか。

革命以後大地主はいなくなりました。農村は農業協同組合ごとに分割され、農民は自分たち自身の土地を持っています。植林は農民の共有地で行われ、JVCの農場もいくつかの協同組合が1haずつ管理します。また彼らはこの農場で働くとその代償に食糧を受けますが、交代で参加するので一部の人が得をするわけではありません。植えられた木も村人自身が管理します。

④大量に森林を破壊し、消費しているわれわれの生活を見なおすことの方が地球の緑を守ることになると思います。

もちろんそう思います。私たちがこの問題に関心ではないです。自然破壊はアフリカだけの問題で



マーシャ村を視察する

はありませんし、私たち北側に住む人間がアジアやアマゾンの熱帯雨林を破壊しています。このプロジェクトのキャンペーンには国内の自然保護団体にも働きかけて、もっと地球的な規模から自然保護を訴えたいと思います。JVCはまず私たちにできることから着手しました。それがエチオピアであり、マーシャ村だったのです。

⑤木を植えることを目的とせず、村人が自分たちの生活を向上させていく結果としての植林であってほしいと思います。

そのとおりです。このプロジェクトは“総合的”とあるように植林が目的のプロジェクトではありません。植林は1つの段階にすぎないのです。今度の干ばつでは多くの家畜を失いました。牛馬に頼っていた耕作方法も改良しなければいけません。どんな作物が干ばつに強いかも調べなければいけません。農業を改良し、貯水池を確保し、そしてその保水のために木を植えるのです。つまり先に植林があるわけではありません。

エチオピアのマーシャ村で始まる「総合的地域復興促進プロジェクト」は通称グリーンプロジェクトと呼んでいたのが“緑”ばかりが前面に出てしまい、植林をするプロジェクトのように受けとられてしまったようです。木はただ植えさえすればよいというものではなく、大橋さんがおっしゃるように、植林のために人々の生活が逆に圧迫されることもありうるわけです。私たちが「角を驕めて牛を殺す」ことのないよう十分注意を払わなければなりません。また外部の人間である私たちがいくらがんばっても真に村の復興はできないでしょう。私たちは村の人々の村を復興したいという熱意に押されて、このプロジェクトに着手しました。私たちが良き相談役として彼らの復興のお手伝いができればと思っています。

エチオピアと僕たち

内山田 康

JVCエチオピア代表

家内安全

JVC東京事務所の斜め向かいに神田明神がある。事務所の皆が集まった正月明けの月曜日、初詣でに行くというので僕もついていった。神田明神はビルの谷間のそこだけが奇妙に東洋的な空間で、どこかのチャイナタウンにきたような印象を与える。家内安全、商売繁盛、安産、合格…。アルバイトの女子学生が神妙な顔でおみくじを売っている。人々は手を二度打ち、さい銭を投げ、やはり神妙に何か念じている。「家内安全、商売繁盛…」正月らしいめでたい気分が場を支配している。その気分がエチオピアから帰ったばかりの僕に、これが日本なのだという強烈な印象を抱かせる。

正月の神田明神はめでたい空気に満たされていて、人間の普遍的な深い悲しみとか苦しみとか、その中から生まれるかもしれない深い喜びといったもの一切が存在しないのだ。一流企業のサラリーマンになった友人がこんな風に語ったのを思い出す。「会社は儲けるだけ儲けてパイがなくなると、人間社会を今までとは別の角度で切ってみる。するとまた別のパイが出てくる」。先進国の日本は発展途上国のパイをムシャムシャ食べる。発展途上国の中でも中国やインドなどはサハラ以南のアフリカを恰好の市場としている。一番貧しいエチオピアのような国にはその下がない。

一流企業の管理職の給与は査定の高割合が高い。営業成績が彼の給与を大きく左右する。だから彼は家内安全のために、日本の商品を本気で売り込むのだ。そして彼は家内安全を思うあまり、パイを食いつくすことが彼の将来にどう関わるのか考えることができない。

反アパルトヘイトとは

エチオピアはその昔、国土のほとんどが森林だった。人々は、その豊かな森林から木を切り出し続けて何千年も生活してきた。そして今、エチオピアには森が無くなってしまった。森がすっかり姿を消してしまうまで人々は木を切り続けたのだ。

問題は、北が進んでいて南が遅れているのではなく、北が悪くて南が正しいのでもない。

去年の10月のある日曜日、僕は教会へ行こうとして家を出ただけけれど、アジスアベバの町へ向かう道が全て閉鎖されていたことがあった。実はその朝、アジスアベバの革命広場で50万人を動員したアパルトヘイトキャンペーンが行われていたのだ。町のあちこちに、鎖を引きちぎろうとしている黒人が描かれた反アパルトヘイトのポスターがはられていた。それから少しして、エチオピア全土で徴兵が始まった。兵士に銃をつきつけられて徴兵の手続きが済まされてゆく。再定住計画も再開された。多くの農民が収穫を直前に控えた自分の土地から無理矢理「自発的」に銃をつきつけられて南西部に連れて行かれるようになった。被災民たちのためにいつも献身的に働いていたエチオピア人のS君は、「アパルトヘイトの南アフリカに住む方がましだ」と言うようになった。反アパルトヘイトキャンペーンは本質的に反アパルトヘイトではない。徴兵や再定住計画のやり方は、本質においてアパルトヘイト的であるのは、正気の人間には判ることだ。

エチオピア人とともに働く

僕たちが今年度からエチオピアで始めようとしている植林、灌漑、農民の教育から成る農村の復興プロジェクトは、すぐ後から一流企業がパイを食べに進出できるような性格のものではない。そして、エチオピア政府の復興計画の一翼を担うものでもない。普通の日本人と普通のエチオピア人が、エチオピアの地で、自分自身の人生を自分自身の手に回復するために、一緒に額に汗して働くというのがその内容なのだ。一体、人間の生活とは何であるのか、僕たちはそこで一緒に働くことで考えるのだ。しかし、一緒に働くことがどんなに難しいことか、しだいに判ってきた。教えるのは簡単だが、彼らから学ぶことはより難しいのだ。学びつつ、一緒に考え、一緒に働くことができるように、僕たちはもっともっと謙虚になりたい。

ゆっくりと沈み始めた巨大な船から手で水をかき出すような仕事を開始しようとしているのかもしれないが、僕たちは皆で悪戦苦闘しながらも、希望が向こうからやってくるのを待っていたい。

去年の雨期の初めのこと、エチオピアの乾ききった高原が湿り始めると、テーブル台地の上にいっせいに名前の判らない黄色い花の絨毯が広がった。生命がこんなにも隠れていたのだ。僕たちは、この光景にどんなに慰められたことだろう。

エチオピア緊急医療救援に参加して

神奈川県立厚木病院 吉野 浄



半年足らずの間でしたが、今回機会あってエチオピアのJVCの病院で働くことができましたので、その感想を主に疾病を中心にお話いたします。

1. エチオピアの疾病構造について

多くの発展途上国がそうであるように、エチオピアの疾病の大部分は感染症です。その他の疾病は診断がつくことが、まれのようです。感染症が主な疾病だと述べましたが、これにはエチオピアの衛生状態が深く関係しているようです。

エチオピア人のほとんどを占める農民一般の暮らし向きはどのようなものなのでしょう。水は最も大事な事柄です。御存知のようにエチオピアの国土の半分以上はテーブル台地と呼ばれる標高2500～3000mの高地にあるために、水の確保が大変です。これは女性の仕事で、大きな水がめを背負って水源まで水を汲みに行く女性の姿が、よくみられます。主な水源はわき水と川の水です。衛生教育がないために川の水が不潔であることを知らないのか、貧困ゆえに燃料を買う余裕がないのか、水を煮沸して飲用することはないようです。1カ月に1度程度衣服を洗うのと同時に身体を洗いますが、そのときだけは湯をわかすそうです。飲用には生水を用い、体を洗うのには湯を使うというのは不自然に思えたので、理由を尋ねましたら実に簡単な答えが返ってきました。高地なので寒いからだそうです。とにかく滅菌されていない、眼でみても濁った水を飲むわけですから、水を媒介とする赤痢、寄生虫疾患や肝炎等が流行します。

水の汚染源として重要なものは排泄物ですが、ほとんどの農家には便所がありません。つまり野原には人や家畜の排泄物が散在し、それが水を汚染するのです。排泄物は水を汚染するだけでなく、はえの良い住み家となります。エチオピアの写真等を見るとよく出てきますが、子供達に群がるはえにより赤痢等の下痢性疾患が、媒介されます。

衣服に関していえば、貧しいことと、乾燥した涼しい気候で汗をかかないことなどの理由で1カ月に1度程度しか洗濯や入浴をしないので、シラミやノ

ミを媒介とする回帰熱、発疹チフス等が流行します。皮膚病の一種である疥癬も身体を不潔にしておくことによりおこります。マラリア、結核、ハンセン氏病等も衛生状態が悪いことと関係があります。

以上がエチオピアにおける感染症の主な原因ですが、実際は日本も30～40年前の衛生状態は現在のエチオピアと大差なく、それ故、似たような感染症が多くありました。

エチオピアに成人病はあるでしょうか。私の滞在中に2例の糖尿病と5例のガンの患者が、来院しました。ガンは3例が乳ガンで他の2例は子宮ガンと直腸ガンでした。大きくなって触診できるようになって始めて発見されるため、残念ながら全員手おくれでした。現地の高卒程度の人達に聞いても、ガンや糖尿病という言葉自体を知らない人がほとんどのようでした。

病気といえるかどうかわかりませんが、干ばつで食べ物が少ないので、現地の人はアロマという雑草の実を食べざるをえません。それを食べると必ずといってよいほど、腹痛や下痢を越えすようです。日本人スタッフの中にはアロマを食べる勇気のある人がいませんでしたので、どの程度具合が悪くなるのかはよくわかりませんでした。

2. 疾病にかかったらどうするか

国営の診療所が各地域に設置されています。原則としては無料なのですが、各医療スタッフが多少のリベートを取るらしく、ほとんどの農民たちは現金をほとんど持っていないので診療所にかかることができず、民間療法や薬にたよることになります。

エチオピアには各種の民間療法があります。患者の前胸部や腹部に焼け火ばしを十数カ所当てて火傷をおかせます。火により病魔を退散させようという考えで、病院には、胸痛や腹痛を訴える患者が、前胸部や腹部に十数カ所点状の火傷を負って運ばれてきます。また別の患者ですが、肘の静脈に木片で作った針を刺し、血液を流れ出させてそれと共に、病魔を体外に追い払おうとしたりします。下痢がひどく脱水症状の強い患者にこの療法をやられると、そ

れだけで命取りになったり、血管確保がむずかしくなったり、点滴をしようと思って腕を駆血すると木片の刺入部から大量に出血して治療のさまたげとなったりします。また手や足の先に傷を負った患者に対して、毒が体内を回らないようにするため、傷の中枢部を縄でしばります。傷の部分は循環障害を起こして治るのに時間がかかったり、最悪の場合には腐ってしまったりします。

祈とう師のような人もいるらしく、また無資格の者が、ある種の権威を与えられて投薬することもあるようです。先日は若い女性がクロロキンを与えられました。クロロキンはマラリアの特効薬ですが、妊婦などでは流産の危険があります。その副作用を期待して一度に大量に服用させるわけですが、その患者さんは頻死の状態で病院に運ばれてきました。幸いにして一命はとりとめました。墮胎に失敗して一命を失う女性も多いようです。

エチオピアには牛の生肉を食べる習慣があります。牛肉には寄生虫の一種であるサナダ虫が寄生しており現地人は定期的にある種の薬草を用いて駆虫します。この薬草には肝毒性があり、繰り返し服用すると肝硬変という病気になります。また薬なのか食料なのかははっきりしませんが、ある種の植物を服すると足の動脈が収縮して血行が悪くなり、両足がくさってしまうこともあるようです。

以上のような治療をしても全く効果がない場合には、マーケットで薬を求めます。テトラサイクリンという抗生物質が2錠25セント（約25円）で手に入ります。この薬をほとんどすべての疾病に用います。1回だけしか服用しないので、医学的にはほとんど効果はないと思います。もう少しお金のある人は最初に申し上げましたが、国営の診療所を受診します。1回3ブル（約300円）かかります。

アジバールにJVCの病院ができてからは、当然のことですが、病院を受診する人が多くなりました。JVCは無料で患者さんを診ていますが、無料ゆえに医療でなく衣食住を求めて病院を訪れる住民も多いようです。

3. JVCアジバール病院の意義

病院ができたために現地ではそれまでは致死的であった人々を、数多く救うことができるようになりました。放置すれば間違いなく死ぬであろう、下痢で脱水のひどい患者に点滴をすることによって、回復が望めるようになりました。肺炎の子供に抗生物

質を注射することにより中等症や軽症の場合はすぐに良くなるようになりました。腸閉塞の患者に対しても大病院（120床）に紹介して、開腹手術を受けさせることができるようになりました。飢餓のため抵抗力の弱っている住民たちの命を一時的に永らえるという初期の目的は確実に果たしたといえます。

しかしながら長い目でみると早魃は、いつまた起こるか分かりません。さらに根本的なことは、いったん下痢や肺炎から一命をとりとめた患者達のほとんど全部は、家に帰ればものもくあみの衛生状態におかれるわけで、汚染された水を飲み、再び同じ疾病を繰り返す可能性が高いということです。つまり病院の存在は一時しのぎでしかないわけです。医療の救助はその効果が直接スタッフにはねかえってくる点では、やりがいのある直接的な援助だと思いますが、根本的な解決にはなり得ません。

4. 感 想

南北問題は大変難しい問題ですが、極端な言い方をすると、アフリカの犠牲の上にヨーロッパやアメリカが、そして東南アジアの犠牲の上に日本がなっているということもいえるかと思えます。今なぜ日本がアフリカかという問題を日本人は常に念頭に置いていなければならないと思います。日本とは直接利害関係のないアフリカよりも東南アジアのことをより考えなくてはならないようにも思えます。

アフリカという第三世界に行ったことで、日本には決して関心をもたないような面に眼を向けることができ、大変良い勉強をすることができたと思うと同時に、自分の価値感に幅がもてるようになってきたと思います。さらに第三世界に出てみて日本の平和さと豊かさを改めて認識させられました。日本は良い国であると思えました。

エチオピアの農民達は日の出と共に起き、大人は農耕に、子供達は学校にいたり、家畜の世話をしたり、コーヒー、歌、踊り以外には娯楽もなく、汚ない衣服を着て、1日1回の食事に甘んじながら暮らし、日の入りと共に就寝します。昼は青い空に広い大地、夜の満天の星空はそれは雄大なものです。エチオピア人は他の国のことなど知らない人ばかりですが、エチオピアがいちばん良いと皆いいます。我々日本人は、日本を含む先進国との比較が可能なのですが、人間本来あるべき姿を考えると先進国に住むのと、エチオピアに住むのとどちらがしあわせなのか考えさせられてしまいます。

エチオピア都市難民エリアス氏の場合

佐倉 洋 (フリージャーナリスト)

エチオピア都市難民エリアス氏の場合

「難民問題は、アイデンティティの問題である」朝日新聞記者の伊藤正孝氏は言う。国を追われ異文化の中で暮らす難民にとって、衣食住の問題とともに心の問題も大きい。一人のエチオピア難民を紹介しよう。彼はファラシャ（エチオピアのユダヤ人で旧約聖書の時代に移住したダンの子孫といわれている）だった。1974年の内戦後ケニアに逃亡。14歳の頃である。その後のケニアでの生活で自分がファラシャであることを自覚し、先祖の地イスラエルに帰還できたらと思うようになった。そしてイスラエルの政府代表部に受け入れを申し込んでいた。反応は、はかばかしくなかった。彼は絶望的になっていた。

1984年9月ナイロビで世界宗教者平和会議が開かれた。難民問題も重要なテーマだった。取材のためこの会議に出ていた私は、ひょっとしたらとイスラエル代表のコーエン博士に彼を紹介したのだ。博士はナイロビのユダヤ人に彼の移住を推薦してくれた。

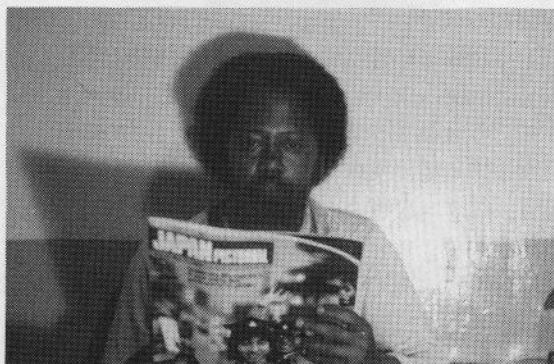
その年の暮、ファラシャの大量帰還があり、(スーダン系由で飢餓におちいった1万5000人余りがイスラエルに行った)彼にも希望が湧いてきた。問題は、彼がユダヤ人であることを証明するものがなかったことである。私は、ファラシャについて調べているとき、古代ギーズ語がエチオピア僧侶とファラシャにしか使われていないことを知った。急いでそのギーズ語を写しとり、彼に見せた。暫く頭をひねっていた彼は、ついに訳しおおせることができた。確か新約聖書のルカ伝の一節だった。私は、イスラエル代表部にそのギーズ語の写しと彼の訳を送った。

次に紹介するのは、彼の小自分史と手紙、コーエン博士からの返事である。最近来た手紙によると、アラブ人たちを恐れて(以前モスクにも出入りしていた)行こうとしなかったシナゴーク^{注1)}にも出入りし、ラビ^{注2)}たちとも親しくなっているとのことである。彼が首尾よくイスラエルに渡り、仕事も得られ、結婚もし、ふつうの人の幸福が得られることを祈らずにはいられない。

注1) ユダヤ教の神殿

注2) ユダヤ教の教師の敬称。

(ヘブライ語で「我が主」の意)



私の小自分史

私は、1960年アジスアベバで生まれた。私の父がファラシャの地ゴンダールから移ってきていたからだ。4歳のときに母が死んだ。私は母に質問したことがあった。「私たちは、エチオピア人なのですか。アムハラ人の子供たちは、休日に新しい服を着るのに、私はなぜ着ないのですか」と。すると母は答えた。「あなたの遠いおじいさんやおばあさんたちは、イスラエルから来たのですよ。そしてエチオピア人たちは、私たちをファラシャと呼ぶのですよ」と。私の母は、決して誰にも私がファラシャであることを言わないようにと警告した。「エチオピア人は、ファラシャが嫌い、私たちが乞食とか呪われた眼とか言うのですよ。それにお父さんに仕事を得られなくなります。もしわかったらゴンダールに連れもどされてしまいます。他の人には、違った部族だと言いなさい。そうすれば、お父さんも仕事とお金を得られ、新しい着物も買ってくれるでしょう」。これが母から贈られた私のたったひとつの記憶である。母の死は、私をひどく苦しめた。母が死んで、私も一人で居ることが多くなった。私の父も他の女性とは結婚しなかった。6歳のとき父は、ハラルゲのディレダワに移った。そこで、私は小学校を終え、中学校に進んだ。このとき内戦がおこった。1974年に、私の父は、兵隊に殺されてしまった。父の仕事については、よく知らない。下級裁判所の事務をやっていたようだ。彼には、教育がなかったからだ。ギーズ語で書かれた羊皮紙製の本を沢山もっていた。

父が殺されたあとで、私は自分の生命を守るためエチオピアからケニアに逃げた。私は、学生キャン

ペーンにも、反政府勢力との戦いにも加わらなかった。ケニアにやってきたとき、イスラエル政府とファラシャとの連絡について全く知らなかった。全く異邦人のように暮らしていた。エチオピアへの帰還も避けていた。一度は拒否された難民認定を二度目にやっと得たものだからだ。私は自分自身を証明するものをもたない。この私の肉体と精神以外には。そして私は一人で生きているのだ。

エリアスからの手紙

今日は、佐倉さんごきげんいかがですか。私は、YMCAにいたエリアスです。私は、1983年の2月17日から7月26日まで刑務所に居りました。つまり83年の7月26日に放免されたわけです。

私の聞き及んだところでは、あなたとクラウディアンが病院と警察の両方へ私を捜しに来て下さったそうですが残念ながら見つけれなかったとの事でした。私は、シャウリ・モヨの警察署からサッカースタジアムの傍のインダストリアル刑務所に移されていたのです。シャウリ・モヨのYMCAのすぐ傍にいたわけです。私に会いにいらして下さいとご努力に感謝いたします。

本日1983年7月31日、難民問題とその他諸問題を話し合う会議に、あなたの友人のクラウディアンと一緒に出席しております。話し会いは、興味深いもので、もし後々必要があれば手紙でお知らせ致します。

私は、何とかやって居りますが、UNHCR、KCS（ケニアカトリック中央協議会）、NCCK（ケニア国キリスト教協議会）に見離されてシャウリ・モヨを出ており、着る物もなく、学校にも行けません。

エリアス

親愛なる佐倉さん

日本でいかがお過ごしですか。私は、あなたのお便りを待ち続けて居りました。何故ならば、前に一度あなたがイスラエルのエルサレムに行くかも知れないと知らせて下さったからです。

1985年の4月にコーエン博士から手紙を受け取りました。内容は悪くないものでしたが、私の方の状況が今だ良くありません。ですから西独に行く方に気持を変えるかもしれません。多くのエチオピア難民が西独に居ることもあり、また西独政府は全員受入れて居りますし、6カ月間のドイツ語教育もしてくれます。そして、その後西独国内で働いたり、ヨーロッパの国々を問題なく旅行できる“ドイツ・パ



スポーツ”をくれます。ですから私は西独行きを思案中です。理由は、もうナイロビで苦しい思いをするのはたくさんだからです。

あなたのベストを尽して下さい。アブラハムの神様があなたの未来の計画のご加護をするでしょう。私は、今でも自分自身で問題を解決しようとしていますが、もっているものと言えば、難民用パスポートのみです。

お願いですから、私がやり直しのきく年令の内に私が失った最高の時を取り戻させて下さい。

エリアス

ジャック・コーエン博士から来た手紙

親愛なる佐倉さん

私は、あなたの手紙を受けとりよろこんでいます。我々の共通の友人であるエリアスが移住の許可を受ける可能性がいまあるからです。非常に多くのエチオピアの我々の兄弟たちがここに着いています。事の詳細については、まだわかりません。その事実でさえも秘密にされていました。事実が明るみに出るとストップされてしまいました。スーダンにとっては、アラブ圧力に抗してユダヤ人をイスラエルに行かせることはやさしいことではありません。私は、エリアスが、私の指示に従ってナイロビのユダヤ人社会との関係を密にすることを希望します。証明書がないことと知りあいがいないことは、イスラエル役人にとって問題なく受け入れることは大変難しくします。しかし、私がナイロビ地域のラビを信じさせることができれば、彼のチャンスは、良くなるでしょう。……略

1985年2月12日

ジャック・コーエン

続・傷ついた微笑の国

カンブチア国内活動について

前号にも書きました通り、過去15年間に渡って戦争や圧政による、人々の苦しみの続いたカンブチアにおいて、この地域の平和と復興につながる手伝いが、何か出来ないかと、合計3週間の調査に行ってきました。又、もし上記の事が実現していけば、やむをえず難民として外国へ避難したカンブチアの人々も、やがて故郷へもどれるようになるだろう、という思いもあります。

被災の状況は？

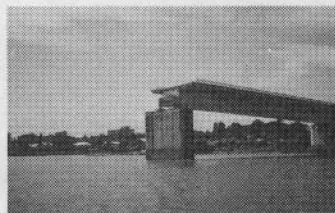
自然とも係わる物理的な被災の一例として、通称「日本橋」の破壊があります。プノンペン市と東対岸を結ぶこの橋は、1972年の爆破以来、壊れたままです。それだけでなく、壊された260mに及ぶ、コンクリートと鉄の大破片が、トンレサップ湖とメコン大河をつなぐ川の流れをせきとめているので、水流が不自然になっています。この為、かつておこらなかつた所での干ばつが起ったり、別の所では洪水が起ったりして、お百姓さん達の生活と生産活動を苦しめています。

その他、市内の寺、教会、学校、田舎の寺、田畑、都市と農村を結ぶ道路などの破壊は、枚挙にいとまがありません。しかし、最大の被災は、人間に表われています。とりわけポルポト時代(1975-78)に多くの人々が亡くなり、生き残った人々にも肉体と精神に深い傷が残っています。一つの共同社会が、円滑に運営されていくには、生産者(この国では多くは農民)と専門職の人々が適切な割合が必要です。しかし、カンブチアでは、教師、医師、技術者、行政担当者などが致命的に欠けています。

各団体はどのような協力活動をしているか？

医療や技術面においては、ソ連や東欧、ベトナムによる援助が大きいといえます。(例えば、プノンペン市の火力発電所はソ連援助)これに対して、西側諸政府は、政治的理由により、政府間援助を一切行っていません。

このような政治的に難しい状況の中で、国連機関



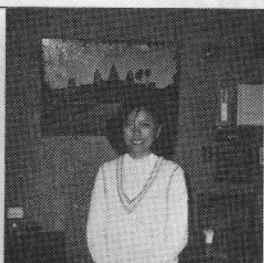
熊岡路矢
JVC 事業担当

やICRC(赤十字国際委員会)及び欧米の民間団体が、それぞれ人道的援助と復興・開発につながる援助を行っています。例えば、UNICEF=病院・孤児院への援助。基礎教育への援助。WFP=米及び野菜の種子、農具の援助。(カンブチアの米自給率は未だ低位。年間30~50万トン足りない) UNHCR=ベトナム、ラオス、タイからの難民帰還者に対する援助。ICRC及び三カ国の赤十字(フランス、スウェーデン、スイス)は、医療援助と医療人訓練。欧米の八つの民間団体(OXFAM, WORLD・VISION等)は、オフィスを常設して、医療や農業、技術、石けん、綿、繻帯工場等の援助を行っています。そして、OXFAMの後には、NOVIB(オランダ)など欧米20の団体がコンソルシアム(協会)を作り支援しているのです。

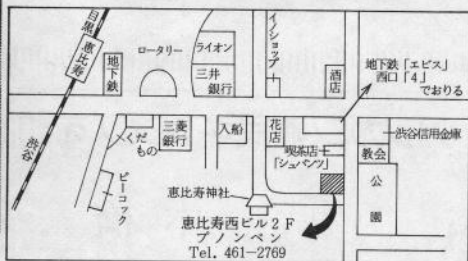
私達はどのように考え、何をするのか？

私は、UNICEFやOXFAMのメンバーや、運輸省や保健省、教育省の担当官と話し合う中で、農村地域への足となるトラック(UNICEFとOXFAMのグループが1980年に寄付した)の修理と修理技術の訓練というプログラムが、現地の必要性も高く、JVCでも応え得ると考えるようになりました。私自身が、自動車整備士であり、JVCにはカオイダン難民キャンプでの技術学校の運営という実績もあります。最終的には、カンブチアの農村の人々の健康や暮しと直結する活動を実現していきたいのですが、その場合でも道路がズタズタになっている現在、私達自身の拠点として、このような輸送を支えるワークショップは必要です。

卒直に言って、エチオピアと同様、社会主義国での活動では、現地の民間人の団体が無いとか、規制が多いとか、やりにくい条件があります。しかし、何とかその辺をかいくぐって、かつしぶとく、カンブチアの普通の人々、大工さんや職人さん、見習いの若者、お百姓さん、おかみさん、子供達とつきあい、又、彼らの生存や健康や勉学に少しでも貢献できるように、頑張っていくつもりです。



ケマリスさん



カンプチア料理店「ブノンペン」恵比寿西

地下鉄「恵比寿」駅西口から地上に出て信号を道なりに右折して1分、右側にクメール料理店「ブノンペン」という小さなネオンの看板がでています。入口から階段を上ると2階に20席足らずのかわいいレストランが昨年10月からオープンしています。近くに喫茶店「シュバント」などがあるだけで、公園や教会に囲まれた比較的静かな通りに面しています。

まだできたばかりなので、週末の夜を除いて特に昼はあまりお客さんがきていないようです。今回金曜日の昼間訪れたのですが、お客さんは、近くの会社の人が2～3人と、カンプチアの人が1人でした。

ロン・ケマリスさんという美しいカンプチア女性がこの店の店主です。1968年フランスに留学して以来故郷のブノンペンに戻っていないそうです。3年間パリでの厳しい条件の中でのアルバイトや勉強の後タイに渡ったのですが、故国にもどれないうちに、1975年4月のクメール・ルージュによる革命となりました。79年までタイで家族を待ちながら、ガイド、肉体労働をしてしのいでいた時、不法滞在外国人として逮捕されました。つてを求めて日本へ来てから難民の認可を受けるまで、日本語ができないこともあって大変苦労したそうです。それでもメイドや語学教師をした後、ガボン大使館で秘書として働くようになりました。この間貯めたお金がこのレストランを始める時の資金となっています。

さてメニューの方ですが、ケマリスさんが料理が好きでレストランを始めたというだけあって、なかなかのおいしさです。彼女のお勧めは、カンプチア風さつまあげ(1200円)、チキンカレー(850円)、ビーフカレー(950円)そしてチキン入りカンプチアスープ(950円)です。苦労するのは、本場の材料やスパイスがなかなか手に入らないことです。例えば、本場のカンプチアスープでは、トマトやパイナップルと一緒に淡水魚を煮込むのですが、日本では魚が高いの

でチキンにしていると言っていました。様々なスパイスについては、名前を日本語にしにくいのですが、20数種類をタイから輸入していて、とうがらしの中で一番辛いブリック・キーターもタイからきます。

チキンカレー、ビーフカレー、ビーフグリーンカレー(950円)(竹の子が入っている)には、スパイスやとうがらしがふんだんに使われています。キティオ(700円)(米粉でつくったソバ、スープつき)は庶民の味で、日本でいえばラーメンとかたぬきそばとかいった食べ物です。

他にビクルス(350円)、ビーフサラダ(950円)、ビーフスープ(950円)、なすのひき肉添え(カレー味)(850円)、チキンカレーソース「ブノンペン」(1300円)、などもおいしそうです。食事のあとは、デザート(京芋又はカボチャのスイーツ 350円)、そしてコーヒー(250円)と締めます。

ケマリスさんに家族の事を尋ねました。お父さんはシアヌーク時代の軍人で、1960年代に死亡しました。彼女は8人兄弟姉妹の4番目で次女です。ポルポト時代を経て現在生きることが確認できるのは、長兄(フランス)と7番目の子供で3女(アメリカ)だけで母親と3人の兄弟と長女や末っ子の4女はまだ行方不明だそうです。ブノンペンに唯一人残っているお祖母ちゃん(母方)の所にも連絡が来ていないので、今だに行方不明ということは「……」ということまで涙を浮べていました。

質問をかえて、「将来の希望は？」とお聞きすると、「このレストランを成功させて、今米国で苦労している妹の一家を日本によび、一緒に暮らしたい。それからいつか必ず祖国にもどり、カンプチアの人人のためのカンプチアにする手伝いをしたい。もう内輪でもめているような時じゃないのに」と、この時ばかりは目を輝かせて話してくれました。

ケマリスさんの他、ドナ・シーさん、リーさん、佐藤君の3人が昼、夜手伝っています。(熊岡)

Dear, My Friend

出会ったこと、思うこと

考えさせられた本、映画……について

原稿、お待ちしております（1000字ぐらい）

アフガン難民キャンプを訪ねて

本橋 栄

そこに難民がいるからというので、そしてそこに日本からの援助が入っているという理由で、私はパキスタンのバルチスタン州へ出かけていった。1978年以來パキスタンへ約250万人、イランへ約180万人のアフガニスタン人が逃がれた。パキスタンではペシャワールを中心とする北西辺境州に約185万人、クウェッタを中心とするバルチスタン州に約50万人が暮らしている。クウェッタ周辺だけで、東西500キロにわたって23カ所のキャンプがある。国境の山岳地帯（標高3000mにおよぶ）では今もゲリラ戦が続いている。

大学もある地方都市、州都クウェッタから最寄りのキャンプ、スルカブまで5～6キロを行くのに、足といえば国連のヘリコプターしかない。むろん車が通っていて、キャンプのアフガン人がじゅうたんをかついて街へ出てくることもめずらしくないのだが、外国人となると、身代金目あてに山賊に誘拐されかねないというのだ。

このあたりの土地を上空からながめて「月面のようだ」と言ったのは、元UNHCR職員でここバルチスタン州の難民キャンプ周辺の植林計画に取り組まれた小池嘉夫氏であった。この植林計画は犬養道子氏の著書『人間の大地』で紹介されて大反響を呼び、「緑の木一本運動」は5年目に入ってなお、UNHCR東京事務所へ寄せられる募金件数の67%（募金額の40%）を占めているほど、“草の根”的広がりを見せている。

連絡の手違いで現場を見ることができなかったのが残念だった。しかし空からの景色を見ただけでも、緑化とか植林が日本では想像もおよばないであろうほど困難である事を垣間見た気がした。

条件は、たまたまその前に訪れたソマリアのルークよりさらに厳しい。ソマリアではキャンプから少し離れれば、まばらなトゲの木がほとんどではあるが、草木はひとたび雨が降れば新芽をふいていた。



しかし、ここではそびえる山塊は岩とガレキがむき出しになっており、ほとんど草木は見えない。わずかに人間が囲って水をひいた部分だけにポツポツと緑が認められる。川は、地面を深く掘り下げてうねって流れているが水量は少ない。

スカルブのキャンプでは、以前 UNHCRが配布した苗木がところどころに生えてはいた。また家庭菜園という形で土堀をめぐらした畑や住居の敷地内に自家消費用に野菜が栽培されていた。しかし荒涼とした大地を緑が覆うというにはほど遠い。「緑の木一本運動」のパンフレットにも書かれているように、雨水を地下に浸透させるための小さなダムや溝を無数に掘ることから始めなければならない。苗木は、ビニールのチューブに土を入れ水が乾きにくいようにして育てている。これを地面に植えた後も、数は減ったとはいえ彼らが大切に飼っている家畜の餌食とならないように保護しなければならない。

かつて文明の栄えた土地が、今は砂漠ないし荒野に変わり果てているという例は多い。難民キャンプは不自然に人口が集中するために、植生の喪失が著しく現われる。しかし、相手が植物であるというだけでなく、土壌、地下水、そしてそこに住む人々の生活様式と結びついているだけに、短期間にいくらお金を注ぎ込んだからといって解決できるものでもない。近代的な農業技術、機械の投入も効果が上がるとは限らない。

緑化ないし植林運動は、一見非の打ちどころがなく、また好感を呼ぶことから、一種のブームになりつつあるように見える。しかし安易な取組み方をすれば努力や資金が無に帰す恐れがある。日本人にありがちなブームに終わらせないために、運動のあり方をもっと掘り下げたいと思う。

JVCの広報のために ネットワークを

O・H

いつも T/E の編集ご苦労様です。

私も A.G.氏 (T/E No. 47)と同様、JVC の会員としてのかかわり方を考えている一人です。読み終った T/E を喫茶店においてもらったり、パンフレット等を病院の待ち合い室に忘れてきたりして、できるだけ JVC のやっていることを知らせているのですがどうも一方通行のようでもの足りなく思っています。

しかし、そうかといって仕事もあることですので、あまり大げさなことをする自信はありません。もっと自分の住んでいる場所とか働いている場所で広められたらよいのですが少々気遅れしてしまいます。JVC の会員とか少しでも関心のある人が近くにいれば何か始めることができるかも知れません。また事務所の方に来ている人達も若い人が増えてきたと伝え聞きます。そういった全部を含めてネットワークを作ることができたらと思います。JVC のオリエンテーションに来た人が具体的な接点を得ることができず、その貴重なきっかけも失われてしまうということも考えられます。以上のような人達の情報を何らかの形で生かすことができないのでしょうか。読者の皆さんや事務局のお知恵を貸していただきたいと思ひます。

もうひとつは始めるにしても「何を」ということがあります。タイの活動にしてもアフリカの活動にしてもまわりの人に知らせ訴えかける際に T/E を見せて回ってもいいのですが、どうもある団体がやっている訪問募金を連想して困ります。それぞれの活動ごとに何か広報キットというようなものはないでしょうか。またそういった集まり(講演会、映写会、バザー等)を開くにしてもどうしてよいやら方法がよくわかりません。経験者の方々からそういったノウハウを教えていただけないでしょうか? そうすれば私にも何かを始めることができるかも知れません。何か事務局の方でそんな企画がありましたらお教え下さい。

O・Hさんへ

事務局

お手紙ありがとうございます。JVC の事務局は会員や日本国内のボランティアには「冷たい」という

声をよく聞きます。ボランティア(自発的)に参加している人々だという思いから、つつい「ボランティアのボランティア」に意味を見い出さないことも原因のひとつです。そのことは、原則として変わりありません。しかし、海外での活動現場の状況を、会員や、より多くの人々に伝え、ともに問題点を共有することが JVC の特色であり、そのパイプ役として事務局はあるのですが、あまり効果的に動いていないことを反省しています。

遅ればせながら、会員間の「ネット・ワーキング」づくりが始まりつつあります。前号で登場した「始まるまで待てないプロジェクト」が全国に散らばっている約 900 名の会員の「会員マップ」を作成中です。近くに住む会員同志が連絡をとりあい、その地域で、アフリカやアジアで「難民とそれと同様に苦しんでいる人々」の状況をより多くの人々に伝え、問題点を共存する為のアクションを起こしてもらえませんか? チャリティーバザーでも、写真展でも学習会でもなんでもかまいません。

近くの会員と連絡をとりあい、2、3人集まれば企画をたててみましょう。写真のセットや映画、資料は JVC に申し込んで下さい。場所(公民館、市役所、学校、教会、誰かの家 etc)、日時を決めます。次は広報活動です。地域の新聞の催し欄に載せてもらいましょう。一カ月前に企画がわかっていたら、毎月の T/E に載せることもできます。

エチオピアの報告にもありますように、今年 4 月より、まず 1 年(プロジェクトは 3 年以上)エチオピアの北部マーシャ村の総合的復興促進プロジェクトのキャンペーン活動を全国各地で行います。キャンペーンの趣意書、活動内容は別紙でお伝えします。「行いませう」と言っても、全国各地にいる会員の人々を中心としてもらいたいのです。

もし、会員の中で仲間が見つからない場合は、地域の社会福祉グループや、環境・難民・アフリカなどの問題を考えているグループと相談して、協力してできないでしょうか? 全国都道府県の市民グループの名簿は事務局にあります。電話で問い合わせして下さい。

知恵を貸していただきたいのは事務局の方です。難民やプロジェクトの対象の人々のニーズを把握することは得意(!?)でも、会員や日本にいる人のニーズの察知能力はかなり低いです(何が知りたいか、知らせたいか、活動したいか etc)。お互い不足を補って頑張りましょう。

JVCプロジェクト

1985年1月25日 現在

| 活動地名 | 活動内容 | 出資団体 | 担当者 |
|-----------------------------|---|---|---|
| 東京本部 | <p>渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行</p> <p>JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時 勉強会———第4月曜日 午後6時～9時</p> | 全国社会福祉協議会 | <p>岩崎駿介(代表)</p> <p>星野昌子(事務局長)</p> <p>熊岡路矢, 柴田久史</p> <p>佐々木志保, 荻野美智子</p> <p>前川昌代, 佐久間典子</p> <p>他15人</p> |
| 日本国内 | <p>●日本語家庭教師</p> <p>東京, 埼玉, 神奈川, 千葉, 山梨に定住している難民の家庭を訪問して日本語及び生活の指導。神奈川県大和市の日本語教室は, 10月中旬より始まった第4期を続けている。3年目の活動の評価を行なうために, 12月いっぱいボランティア募集を休止し, 評価のための話し合いをしている。</p> <p>インドシナ以外のイラン, アフガニスタン難民も対象に活動している。機関誌の『そんぼっと』(クメール語で「手紙」の意)を毎月発行している。</p> | (財)アジア福祉教育財団・難民事業本部 神奈川県福祉部 禅林寺 | <p>森山久寿子</p> <p>地区連絡係11人</p> <p>他約70人</p> |
| | *バザー, ハンディクラフト販売 | | 関田鶴子 他約20人 |
| ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) | <p>●農業による自立促進</p> <p>難民の人々とスタッフの汗の結晶ともいえる, 全長1kmにも及ぶユニット4の用水路が完成し, 皆で一緒に労をねぎらった。また新しく拡張する50haの農場予定地の地主らと交渉を始めた。</p> <p>試験農場も1haの拡張を開始した。</p> <p>農業教室に地元民の長老シェクダヒル氏を迎えて, 今後週2回の教室を予定している。</p> <p>スタッフの人数が増加したのに伴い宿舎の拡張を行っている。</p> <p>●補助給食/基礎医療</p> <p>マグドールに住む4万人の人々をプロブルディへ輸送開始した。1回目は30～35台のトラックでコンボイを編成し, 約1000人を輸送した。JVCのスタッフも同行し, 旅行中の病気, 事故にそなえた。</p> <p>●医療施設建設</p> <p>プロブルディでの医療施設建設が燃料不足のため, 工事の進行が遅れている。スタッフの宿舎の建設も平行して進められている。</p> | UNHCR レフュージュズ・インターナショナル 朝日新聞厚生文化事業団 仏国土をつくろう会 創価学会 ジャパン・タイムズ | <p>税田芳三(ソマリア事務所長), 山口誠史, 掛村均</p> <p>高橋一馬, 米澤聡</p> <p>久保祐輔, 柿原建三</p> <p>千田悦子, 鶴田三芳</p> <p>中川正憲, 荻ノ迫善六</p> <p>モハメッド・アデン・モハメッド, シアッド・モハメッド・ムザール, ラシッド・モハメッド・ランガーレ, サディック・モハメッド・アリ, モハメッド・ハジ・ヌール,</p> <p>ジョニー・バグマン</p> <p>嶋紀晶, 樫田秀樹</p> <p>中路美和子, 石井弘代</p> <p>現地スタッフ16人</p> |
| エチオピア アジバール (ウォロ州) | <p>●緊急医療/入院患者への治療のための給食</p> <p>1月末に閉鎖を予定しているためその準備をしている。2～3人入院患者が残るようなので彼らの処遇について話し合っている。</p> <p>●林, 内山田を中心に来年度の「総合的復興促進プロジェクト」(5haの農地, 30haの植林, 灌漑用の貯水池, 基礎的開発教育)の視察, 計画立案のため, エチオピア政府(RRC), 地区行政官, 農業協同組合と交渉している。</p> | 朝日新聞厚生文化事業団 立正佼成会 神奈川県 ユニセフ・エチオピア CRDA BAND-AID 西本願寺 | <p>内山田康, 林達雄</p> <p>工藤美美子, 福村州馬</p> <p>加納妙, 内藤のぞみ</p> <p>山科司</p> <p>現地スタッフ約60人</p> |

| 活動内容 | 活動内容 | 出資団体 | 担当者 |
|----------------------------------|--|---|--|
| バンコク事務所 | 渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー等。 季刊『ニュース・レター』(英語・タイ語)発行 | 全国社会福祉協議会 一般寄付 | 佐藤正喜(バンコク事務所長), 中山清秋 ボンビモン・チャイブーン カモン・ミンムアン 斎藤美香代 他約10人 |
| カオイダン (カンブチア 難民キャンプ) | ●西崎憲司記念技術学校 モーターバイク, 自動車,(1シリンダーエンジン)の整備と溶接の技術訓練を実施している。 居住者登録がされてない約7200人に食糧配給が開始され, 彼らは隣接のサイト7に移動中。 | UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 妙心寺派宗務所 花園会 | 常田正行, 熊木政江 トンディー・ソムカネ ソムヨット・ラタナタム |
| タイ・カンボジア 国境 (カンブチア 難民村) | ●レントゲン移動診療 移動レントゲン車による, 難民村及びタイ被災村の巡回レントゲン診療。 バンブー村, サイト2, サイト6にて活動中, 活動対象者は4651人。 ●補助給食 緊張が続いているが, まだ昨年のような直接的な攻撃はない。UNBROは, 現在のサイト2よりタイ国内に近いサイト3を避難地として用意している。 | WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東地区医療部会, 城西病院 西本願寺 結城青年会議所 | クリアクライ・プティ ヤビブン スラ・プロムチャン ヴィジョン |
| パナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設) | ●文化オリエンテーション ①日本語の日常会話の習得 ②日本に関する概略的な情報伝達 ③日本へ行くまでの手続き等の理解を深める | 天理教千葉 | 浜崎妙子, ティアン・パントゥー |
| 地域開発 | ●バンコク市内のスラム地区 奨学金援助: スラム地区定住児童のための学費援助 図書館: 6区にあるバンコク市の青少年センターの一角を借り受け活動中。 建材提供: スラム立ち退き者, あるいはスラム内に保育所等を建設する際の物資援助 ☆活動の記録用などに使用するための, フラッシュ内蔵の35mm小型カメラを譲って下さい。 | モラロジーMIRC NTV, JOFIC 庭野平和財団 YMCA横浜 聖ヨゼフ老人ホーム | ヴァラナット・ドゥアンウドム 加藤哲也 サムルエイ・ジョンヨークラン アルニー・プロマ ウティパン・ラタナタリー |
| カンブチア (プノンペン) | ●ワークショップ 1980年以降, 国連および西側諸団体から寄付された, 救援と復興のための輸送トラック(日本製, 英国製)の多くが故障したまま放置されている。これらのトラックを修理し困窮の状態にある農村への物資供給を円滑にすると共に, 技術者を育成することに協力する。 | (協力団体) ユニセフ・プノンペン事務所 | 熊岡路矢, 簗田健一 古西 勇 |
| 人材派遣プロジェクト | | | |
| フィリピン (パターン・プロセッシング・センター) | ●国際移民委員会(ICM)一第三国定住手続きにともなう医療業務 | 城西病院 | 青井千恵 |

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは一Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名-JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名-JVC東京事務所
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (1月小計 254,014円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. インドシナ難民救援募金 (1月小計 12,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. カンプチア募金 (1月小計 56,000円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- D. クロントイ・スラム募金 (1月小計 33,000円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- E. デッグ・スラム奨学金募金 (1月小計 134,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- F. 日本語家庭教師募金 (1月小計 0円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- G. 医療募金 (1月小計 0円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- H. ボランティア募金 (1月小計 0円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- I. JVC運営経費募金 (1月小計 36,002円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. 無指定募金 (1月小計 198,224円)

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
 東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
 加入者名-JVC東京事務所

編集後記

▶早いものでエチオピアで緊急医療に取り組んでから1年が過ぎる。JVCの病院をとり巻くようにしていた人々もそれぞれ村に帰り、入院患者が数人残るのみとなった。そして病院としての役目は、衰弱した飢餓民を救うというよりも地域の医療施設となっているようである。いつもながら緊急援助の引き際は難しい。明らかに状況は変わったのになかなか「もういい」とはいきれないのだ。吉野医師の撮影した写真には腐った手足や身体中いたるところの潰瘍や腫瘍が写っている。手遅れのものも多い。公衆衛生の知識がなかったり誤った医療が原因である。緊急事態は去っても一朝一夕に問題は解決しない。



昭和61年2月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代
 発行人 星野 昌子
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
 ☎03(834)2388 Telex:2323187 JVCHQ J
 バンコク事務所 JVC THAILAND
 67 South Sathorn Road
 Bangkok, THAILAND
 ☎(286) 4857
 Telex:87032 COMSERV TH
 ソマリア事務所 JVC SOMALIA
 c/o UNHCR P.O. Box 2925
 Mogadish, SOMALIA
 Telex:794 HICOMREF SM
 エチオピア事務所 JVC ETHIOPIA
 c/o Embassy of Japan P.O.Box
 5650 Addis Ababa, ETHIOPIA
 印刷所 (株)ベスト・プリンティング
 *本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円